

新調された全日本クラブ野球選手権の優勝旗を誇らしげに広げる和歌山箕島球友会の西川忠宏監督（左端）と選手たち

—和歌山市で



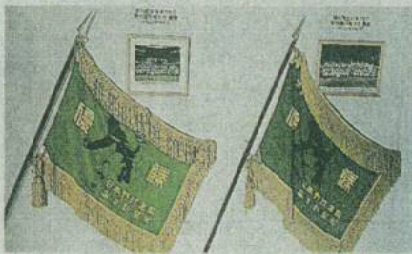
わかやまスポーツ
お宝を巡る

クラブ野球選手権の新優勝旗

県内唯一の社会人野球チーム、和歌山箕島球友会が指定管理者となつて

いるマツゲン有田球場（有田市宮崎町）の正面玄関を入ると、真正面に今年9月の第40回全日本クラブ野球選手権大会で3回目の優勝を遂げた証し、真新しい優勝旗が飾られている。

箕島球友会 初代保持チームに



第31回大会（右）と第38回大会の優勝旗—マツゲン有田球場で

今年の大会が第40回だったことを記念して、大会のシンボルマーク「写真」が新調されたのに伴い、大会旗などとともに作成された。

これまでの優勝旗は大会ごとに作成され優勝チームに贈られてきた。第31回（2006年）、第38回（13年）大会を制した箕島球友会もすでに2本所持し、同球場に飾られている。しかし、毎年の優勝チームが回り持ちで保管することになった新優勝旗は、ワシをイメージさ



せるシンボルマークを中央にデザインし都市対抗野球大会の黒獅子旗、社会人野球日本選手権大会のダイヤモンド旗にも劣らない豪華な装飾が施されており、従来のものは質感がまったく違う。激闘を重ねてきた大会の歴史の重みが、必要とした旗といえるだろう。

今年の大会の決勝で相まみえたのは、前述のとおり2回の優勝経験があり、準々決勝では最多優勝10回を誇る全足利クラブ（栃木）も倒した箕島球友会と、第32回（07年）、第33回（08年）、第39回

（14年）大会で3回優勝の「欽ちゃん球団」こと茨城ゴールデンゴールズ。いずれも新優勝旗の記念すべき最初の保持者となるにふさわしいチームだった。結果は茨城の投手陣を中盤から終盤にかけて打ち崩した箕島球友会が、3日連投して最高殊勲選手に選ばれたルーキー、寺岡大輝投手の頑張りのもあって制し、大旗は浦川拓人主将の手に渡った。

これからもクラブ野球選手権では、数々の熱戦が展開され、優勝チームが手にするこの旗の重みは増していくことだろう。いつの日か球場から約3キロ離れた県立箕島高校に1979年に置かれていた紫紺と深紅の大優勝旗のように、有田市民や県民が存在を誇れるような旗になって、同球場に再び飾られることを期待してやまない。

【矢倉健次】